

黙示録3章1-6節 「霊的無気力の教会」

1A 死んでいる教会 1-3

1B 外からの評価 1

2B 覚醒 2

3B 盗人のような来臨 3

2A 白い衣を来た者たち 4-6

1B 主との歩み 4

2B いのちの書 5-6

本文

黙示録3章を開いてください、私たちは今、主イエス様がアジアにある七つの教会に対する言葉を読んでいっています。エペソ、スミルナ、ペルガモ、テアテラと来ました。そして tonight は、スミルナにあった教会に対する主の言葉を読みます。

1A 死んでいる教会 1-3

1B 外からの評価 1

1 また、サルデスにある教会の御使いに書き送れ。『神の七つの御霊、および七つの星を持つ方がこう言われる。「わたしは、あなたの行ないを知っている。あなたは、生きているとされているが、実は死んでいる。

「サルデス」は、テアテラからさらに南東に約 50 km 内陸に入ったところにある町です。古代には、ルデヤ(リュディア)王国の首都で、アジアの中心地である、エペソ、スミルナ、ペルガモからの街道が交わる場所にあり、内陸からエーゲ海に通じる重要な街道の途上にあるということで、一つに軍事的な要所となっていたこと、もう一つは通商の要所にもなっていました。そして



サルデスには広大な平野が広がっていて、そこを支配できるという利点もありました。それで、膨大な富が集まり、最後の王クロイソスは「富める者」と同義語になっていました。



美術工芸に優れていて、金銀の貨幣を初めて鑄造したのもサルデスです。そして、テアテラと同じように、染料や繊維でも有名でありました。後で、「白い衣」を主が与えるという約束があります。それから、他のアジアの町々と同じように、偶像礼拝に濃厚でした。キュベレーという、地母神が拝まれていましたが、それは性的な乱交儀式が特徴で、道徳的に非常に乱れた町でもありました。そのキュベレー神殿の跡地に、後にサルデスはエペソの女神アルテミスの神殿を建てます。

サルデスに特徴的なのは、トロモス山の山裾の険しい高い尾根に、アクロポリス(城砦)を建てたことです。これだけの自然要害は珍しく、難攻不落とされていました。ところが、あっけなく敵の手に落ちた歴史を持っています。しかも一度だけではありません。ペルシヤのクロス王がクロイソスが王座を示すこの町を包囲したのですが、どこからも攻め上ることのできる隙がないように見えました。城砦の中に突破口を見つけた部隊には、大きな報酬を約束していました。ある兵士が、じっくり見ていると、城壁の上から、兜を落としてしまった者が何の苦労もなく下に降りてきて、それからまた上がっていく姿を見たのです。つまり、隠れた坂道がそこら辺にあるということです。それで秘かに精鋭部隊にそこから侵入するべく、その山道を上っていったところ、城壁のところまで来ました。ところがだれも護衛していません。サルデスの兵士たちは、自然要害に自信を持っていたので、目を覚まして見張る必要を感じていなかったのです。こうして、いとも容易くこの町を征服したのでした。そして二百年後、同じようにしてギリシヤのアレキサンダー大王が攻め取りました。

このような歴史を持つサルデスにある教会は、イエス様のこの言葉を聞いて、ずっしり来たことでしょう。「あなたは、生きていとされているが、実は死んでいる。」自然の要害によって、自分たちは生きていたと思っていた彼らが、殺されてしまったのと同じように、霊的に眠っており、死んでしまっているのだとイエス様は指摘されたのです。

イエス様は、ご自身を「神の七つの御霊、および七つの星を持つ方」と言い表されました。それぞれの教会に対して、ヨハネに現れたお姿の一部を紹介しておられるのですが、サルデスにある教会に対しては、七つの御霊と七つの星、すなわち、神の御霊をもって、諸教会全体を支配しておられるのだということをお話しになっているのです。「七」は神の数字で完全であることを示します。教会とは、神の御霊がおられるところです。「1コリント 3:16 あなたがたは神の神殿であり、神の御霊があなたがたに宿っておられることを知らないのですか。」そして、教会はキリストの体であり、「一つのからだとなるように、一つの御霊によってバプテスマを受け、そしてすべての者が一つの御霊を飲む者とされたからです。(12:13)」とあります。私たちが絶えず、神の御霊に拠り頼み、この方の声を聞き、導きを受け、そして御霊の下さる賜物を用いて神に仕えます。御霊によって、私たちは教会が教会として生きることができます。

他の教会に対してと同じように、「わたしは、あなたの行ないを知っている。」と言っておられます。主からは、何も隠すことはできない、すべての行ないを知っておられます。これまでの教会は、イエス様は彼らの人目につかないことについて、ほめるために「知っている」と言われていました。エペソの教会に対しては、労苦や忍耐があり、ご自分の名を否まなかった、スミルナの教会に対しては、苦しみと貧しさを知っている、ペルガモの教会に対しては、サタンの王座があるのにそれでも信仰を捨てなかった。テアテラの教会に対しては、「あなたの愛と信仰と奉仕と忍耐を知っている」と言われました。ところが、ここでは称賛ではなく、非難の言葉としてこの言葉を使っておられます。生きていとされているが、実は死んでいるのを知っている、ということです。これは、かなり深刻なことであります。ほめるべきところがあるが、欠けがあるのでそれを悔い改めるのと、教会全体が主ご自身から離れてしまっているというのは大きな違いです。

「あなたは、生きていとされている」と主は言われています。これは、そういった評判があるということ。そのように言われている、ということです。ですから今、サルデスの教会があれば、「すごいじゃないか、生き生きとした教会ではないか。」と見えるのです。しかし、「実は死んでいる」と主は言われます。良い評判があるからといって、そこが御霊の命を持っている教会とは言えないのです。活動が多くあって、生き生きとした礼拝賛美があって、キリスト教の世界の中ではよく知られていて、誰もが知っているというような場合では、本当は死んでいるということはありません。

何をもって「実は死んでいる」のでしょうか？これまでの教会を見れば、明らかです。エペソ、スミルナ、ペルガモ、テアテラの教会ですが、スミルナを除いてイエス様は全てに非難すべきことがあ

る、と言われても、それでもイエス様の名を保っていることによる戦いを持っていました。信仰の戦いが、その異教の文化や物質的豊かさの中で熾烈なものがあったのです。イエス様は、その信仰の戦いをしなさいとスミルナにある教会に対して、励ましておられません。なぜなら、「もう死んでしまっている」からです。つまり、周りの文化との対立する接点がない、ということであります。もう死んでしまった兵士に対して、敵兵は銃を撃つ必要はありません。戦いや葛藤がない、ということ、「なんとなく満足していて、特に何かすべきことはない」という霊的な無感覚、無気力は、悪魔にさえ相手にしてもらえない死んだ状態であると言えます。

自分たちの信仰が、人々をつまづかせないという状態は、霊的には眠っている状態です。イエス様の山上の垂訓において、「心の貧しい者は幸いです。」との宣言から始まり、「義のために迫害される者は幸いです。」という言葉で終わっていることを思い出してください。十字架は、救われる者には神の力ですが、ユダヤ人にはつまづき、ギリシヤ人には愚かさなのです。人々とうまくやっていくことのできるキリスト教、よく思われるキリスト教は、死んでいるとみなしてよいでしょう。私たちは、「クリスチャンとしてよく見せていかなければならない。」という圧迫感を自ら受けていますが、イエス様ご自身が主人であり、イエス様は、弟子は主人にまさらないと言われたのです。イエス様以上にならないでください、イエス様以上になれないし、なっていたとしたら死んでしまいます。

これまでの学びの中で少しだけ触れましたが黙示録2章と3章に出てくる七つの教会を、全教会史の七区分として見る解釈もあります。エペソの教会が、使徒たちが生きていた時の教会であり、スミルナがローマ皇帝による激しい迫害を受けた初代教会時代。ペルガモが、キリスト教が国教化された時代であり、次にテアテラが、中世の暗黒時代に匹敵するという解釈です。そして、サルデスの教会は、霊的に墮落した教会に対して異議を申し立てたマルチン・ルターから始まった、プロテスタントの教会、あるいは宗教改革の時代であるとしています。そしてもちろん、私たちが通っている教会は、プロテスタントの教会です。

宗教改革には三本柱がありました。一つ目の柱は、「信仰による義」です。秘跡と呼ばれる、数々の儀式を通ることによって、神の国に入れるとしてカトリックに対して、ただキリストを信じる信仰によって救われるとしました。二つ目の柱は、「聖書のみ権威」です。カトリックは教会と聖書の権威を同列に置き、教会の伝統を聖書と同じように大切にしましたが、聖書こそが最高権威であり、私たちの信仰や生活の唯一の基準であるとしました。そして三つ目の柱は、「万人祭司」です。カトリックは司祭を通してイエス・キリストに近づき、そして父なる神に近づくという、仲裁的な奉仕を持っていますが、だれもがキリストを通して、父なる神に近づくことができる、としました。

このような三つの柱を持って、プロテスタントの教会は成り立っていますが、私たちは今の話を、「当たり前のこと」「いつも聞いていること」として受けとめられると思います。けれども、実際上の話はどうなっているのでしょうか？信仰によってのみと言いながら、水のバプテスマを受けるときにタバ

コを吸っている人を受けさせなかったり、什一献金を約束させたりする教会があることを聞いています。そして、「権威は聖書のみ」と言いながら、実際上は、信者ひとりひとりが聖書によって吟味することをせず、誰かに言われたおkとを盲目的に従っていることがあります。それから、「万人祭司」についても、伝道を牧師に任せ、自分は奉仕者ではないとするのならば、祭司的な働きをしていないこととなります。「生きてるとされるが、実は死んでいる。」のです。

私たちは、それぞれ、教団や、一つの教会の流れに属しています。そしてその教団や教会が出来たその流れを見ますと、多くの場合、聖霊によっていのちあふれた、すばらしい神の働きを見ることができます。そして今、人々には、「あの教団は、とても良いところだ。」という評価を得ます。けれども今は、実際上は、その内実である御霊のいのちが失われていることが多いです。一世代から二世代、三世代に入っていくにしたがって、聖霊による感動がなくなり、靈的に無気力な教会となってしまいます。クリスチャンの家庭でもしかり、そして一個の地域教会の歴史においてもそうです。

2B 覚醒 2

2 目をさませなさい。そして死にかけているほかの人たちを力づけなさい。わたしは、あなたの行ないが、わたしの神の御前に全うされたとは見ていない。

死んでしまっている彼らに対して、イエス様は、「目をさませなさい」と言われます。イエス様は何度となく、私たちにこの命令を与えられました。それは、悪魔による反対が激しい時に、その戦いの中で、次に来ることをしっかりと見ていなさいという意味合いで使われています。ゲッセマネの園において、「誘惑に陥らないように、目をさまして、祈っていなさい。心は燃えていても、肉体は弱いのです。(マタイ 26:41)」と言われました。彼らは目を覚ましていなかったのも、イエス様を捕える者たちが来た時に逃げてしまい、ペテロはイエス様を三度、否みました。それでもイエス様が目を覚ましておられて、サタンの願いが聞き届けられた時に、イエス様は父なる神に執り成しをしておられたので、信仰がなくなることはありませんでした。そして、「立ち直ったら、兄弟たちを力づけてやりなさい。(ルカ 22:32)」と言われます。靈的に目を覚ましている時は祈ることが必要です。「目をさまして、感謝をもって、たゆみなく祈りなさい。(コロサイ 4:2)」

そして十字架に向かう時の激しい戦いと困難だけでなく、再臨においてその終わりの日における困難においても、目を覚ましていなさいと主は言われます。「1テサロニケ 5:6 ですから、ほかの人々のように眠っていないで、目をさまして、慎み深くしていきましょう。」イエス様は、ご自身が来られるのがいつの日か分からないのだから、目を覚ましていなさいと命じられ、忠実な僕と愚かな僕の喩え、それから十人の乙女の賢い乙女と愚かな乙女の喩えを語られました。

そして、「死にかけているほかの人たちを力づけなさい」と言われます。これはちょうど、先に引

用した、主を三度否むペテロに対して、前もって、「立ち直ったら、兄弟たちを力づけてやりなさい。」と言われたのと同じです。立ち直って、立ち直ったら、多くつまずいてしまっている兄弟たちを立ち直ることができるように力づけなさいということです。強めて励ます働きはとても大切です。「1テサロニケ 3:2-3 私たちの兄弟であり、キリストの福音において神の同労者であるテモテを遣わしたのです。それは、あなたがたの信仰についてあなたがたを強め励まし、このような苦難の中にあっても、動揺する者がひとりもないようにするためでした。あなたがた自身が知っているとおりに、私たちはこのような苦難に会うように定められているのです。」そして、この強め励ます奉仕によって、私たちは再臨の主イエスに見える心備えができます。「3:13 また、あなたがたの心を強め、私たちの主イエスがご自分のすべての聖徒とともに再び来られるとき、私たちの父なる神の御前で、聖く、責められるところのない者としてくださいますように。」

そしてなぜ眠ってしまうのか？「わたしは、あなたの行ないが、わたしの神の御前に全うされたとは見ていない。」ということです。逆に言うと、全うしたという慢心があるということです。サルデスの城砦が堅固であるように、自分も霊的には堅固であると思いついでいることです。信仰の競走を走っているのに、自分は目標にまでたどり着いたと思うことです。このような悪い意味での立ち止まりは、霊的に死をもたらします。ちょうど血流が止まるようなもので、血液や流れているからこそ酸素を送り込むことができるのであり、血があることそのものが命をもたらしているではありません。途中で完成したと思った人では、ヤコブがいます。ラバンとの確執がありそこを流れ、次にエサウと会う時に、御使いとの格闘があり、イスラエルとの名が与えられました。そして彼はヨルダン川を渡り、主が会ってくださったところ、ベテルに行かなければいけないのに、その途中の町シェケムで滞在し、自分の名を記した記念碑まで作ったのです。その結果、シェケムの主の息子から娘ディナが凌辱を受けました。そしてそこから出て行く時は、いつの間にか異教にまつわる物を身に付けていました。主は、「ベテルに上りなさい」と命じられます。

私たちは完成されていません。いつまでもキリストの十字架に寄り添って、自分は罪に対して死んでいただけども、キリストが甦らせてくださったことを知り、そこから主と共に歩む必要があります。主が戻って来られるまで、その競走を走りぬくのです。「ピリピ 3:12-14 私は、すでに得たのもなく、すでに完全にされているのでもありません。ただ捕えようとして、追求しているのです。そして、それを得るようにとキリスト・イエスが私を捕えてくださったのです。兄弟たちよ。私は、自分はすでに捕えたなどと考えてはいません。ただ、この一事に励んでいます。すなわち、うしろのものを忘れ、ひたむきに前のものに向かって進み、キリスト・イエスにおいて上に召してくださる神の栄冠を得るために、目標を目ざして一心に走っているのです。」

3B 盗人のような来臨 3

3 だから、あなたがどのように受け、また聞いたのかを思い出しなさい。それを堅く守り、また悔い改めなさい。もし、目をさまさなければ、わたしは盗人のように来る。あなたには、わたしがいつあ

なたのところに来るか、決してわからない。

私たちが、死んでしまっている状態、眠っている状態からどのようにして立ち直る、すなわち悔い改めることができるのか？それは、「あなたがどのように受け、また聞いたのかを思い出さない」というところから始まります。エペソにある教会でも、「どこから落ちたかを思い出し、悔い改めて、初めの行ないをなさい。(2:5)」とイエス様は言われていました。いつの間にか、私たちが何度も何度も聞いていることが、心に入らなくなっている時があります。しかし、聖霊によって、いつも聞いているはずのことが、実は自分がそこから遠く離れていたことに気づきます。「どのように受け、また聞いたのか」ということを思い出さないといけません。パウロはエペソにいる信者に、異邦人のように虚しい心で歩んではならない、彼らは知性が暗くなり、道徳的に無感覚になり、好色に身をゆだねている、しかし、「エペソ 4:20-21 しかし、あなたがたはキリストのことを、このようには学びませんでした。ただし、ほんとうにあなたがたがキリストに聞き、キリストにあって教えられているのならばです。まさしく真理はイエスにあるのですから。」と言いました。

そして、どのように受け、聞いたのかを思い出せば、次に、「堅く守り」ます。サルデスにある教会の信者たちは、表向きはとても柔らかかったことでしょう。しかし、それは霊的にはとても危険であります、聞いて受け入れたものを、しっかりと堅く守るといふ営みが必要です。そして、堅く守るといっても、またすぐに忘れてしまいます。ですから、これは継続的なものであり、忘れてしまうごとに、主がここで言われているように、「悔い改めなさい」ということです。このことによって、これまで長い事使われていなかった車に、聖霊というガソリンが入れられ、エンジンをかけて、初めはぎこちないけれども、少しずつ安定した運転と走行をすることができるようになる車のように、歩みだし、走ることができます。

そして、厳しい警告がここにはあります。もし、悔い改めなかったらどうなるのか？目を覚ましていなければどうなるのか？「わたしは盗人のように来る。」であります。主はご自身が再臨されるにあたって、何度となく、「盗人のように来る」と言われました。それは予期せぬ時に来る、ということです。「マタイ 24:43-44 しかし、このことは知っておきなさい。家の主人は、どろぼうが夜の何時に来ると知っていたら、目を見張っていたでしょうし、また、おめおめと自分の家に押し入れられはしなかったでしょう。だから、あなたがたも用心していなさい。なぜなら、人の子は、思いがけない時に来るのですから。」

私たちの社会は、主の再臨が近づくにつれて、このように予期せぬようなことが今までより頻繁に来るようになります。愚かな乙女と賢い乙女の違いは、前もって油を用意していたかどうか、でありましたが、前もって用意していないと、その霊の戦いの激しさの中で、ただ感情的に反応してしまい、心が傷を受けるだけで、御心に沿って祈り、行動することがとても難しくなります。そして、自分を守ろうとして、もがけばもがくほど、キリストと福音ではないところに何かを求めていき、後で

強く失望するのです。ちょうど、十字架にキリストが向かわれるのに、主の御座の右や左で誰が着座するのか議論していて、その数日後に、主から逃げてつまずいた弟子たち、のようです。

そして、主が盗人のように来られれば、備えのない者たちは裸を見られるようにして大きな恥を受けるとあります。ハルマゲドンの戦いについて主が語られる時に、「・・見よ。わたしは盗人のように来る。目をさまして、身に着物をつけ、裸で歩く恥を人に見られないようにする者は幸いである。(16:15)」とされています。裸で歩くのを見られるというのは、暗闇の行ないをしていて、それが明るみに出されるということがあるでしょう。そして恥を見るというのは、自分が今まで期待していたこと、拠り頼んできたことが全て台無しになることを意味しています。私たちが一昨日、ツロに対する預言で、海の真ん中のタルシシュの船が沈んだ時に、激しくなく海の船員たちの姿があったでしょう。あれが、「恥を見る」ことであります(27:30-31 参照)。黙示録 18 章の、バビロンの崩壊でも同じように出てきます。

2A 白い衣を来た者たち 4-6

1B 主との歩み 4

4 しかし、サルデスには、その衣を汚さなかった者が幾人かいる。彼らは白い衣を着て、わたしとともに歩む。彼らはそれにふさわしい者だからである。

ここにも、サルデスの教会の深刻さがあります。ペルガモやテアテラの教会においては、妥協する者たちが幾人がいて、それをそのままにさせているという叱責の言葉でありましたが、こちらは、まともな人々が幾人かいる、ということです。大多数が主から離れており、わずかに主の内にいる人々がいる、ということです。

ここで主は、「衣」について話されます。これは織物や染料で有名なサルデスには、分かり易い話だったでしょう。これは、キリストにある新しい歩みについて語っている言葉です。「エペソ 4:22-24 その教えとは、あなたがたの以前の生活について言うならば、人を欺く情欲によって滅びて行く古い人を脱ぎ捨てるべきこと、またあなたがたが心の霊において新しくされ、真理に基づく義と聖をもって神にかたどり造り出された、新しい人を身に着るべきことでした。」サルデスにある、異教や不品行、富への執着など、そうした汚れに対して、自分もその中にいることによって順応していた人たちは、衣を汚してしまっています。けれども、そうではなく、神の聖と義にかたどられた新しい人を身に付けて、それに従って生きようとしている人々は、汚していません。

主は、そのようにしている者たちに、「彼らは白い衣を着て、わたしとともに歩む」と約束してくださっています。自分自身の力によって、聖く生きることなど決してできません。聖霊の助けによって、白い衣を保っていることができ、そして主との歩みを確立できます。歩むというのは、夫婦が同じ人生を共に歩んできたというのと同じように、交わり、分かち合い、共有してきた、生活をいっしょ

にしてきたという親しみを言い表しています。エノクがそういう人でしたね、「創世 5:24 エノクは神とともに歩んだ。神が彼を取られたので、彼はいなくなった。」イエス様と共に歩み、そして主によって天に引き取られる、という生活です。

2B いのちの書 5-6

5 勝利を得る者は、このように白い衣を着せられる。そして、わたしは、彼の名をいのちの書から消すようなことは決してしない。わたしは彼の名をわたしの父の御前と御使いたちの前で言い表わす。

黙示録には、「白い衣」が数多く出てきます。主ご自身の思いの中に、私たちが聖なる者となること、清められていることがとても大事なものであることを教えています。例えば、7 章 14 節、「彼らは、大きな患難から抜け出て来た者たちで、その衣を小羊の血で洗って、白くしたのです。」小羊の血、キリストの血によって私たちが清められ、そして生活にも清さが表れます。これが白い衣であり、キリストが戻って来られる時には、この体そのものも変えられ、キリストに似た者になるのです。

そして大事な約束があります。他の教会に対しても主は約束されましたが、「確かにあなたは永遠の命を受け継ぐのだ」という保証です。これまでは、例えば、「神のパラダイスにあるいのちの木の実を食べさせよう。(2:7)」であるとか、「決して第二の死によってそこなわれることはない。(2:11)」であるとか、ありました。ここでは、「彼の名をいのちの書から消すようなことは決してしない」ということです。主によって、名が書かれていることについては、ペルガモにある教会でも約束されていました(2:17)。

神には、ご自分のものとする者たちをご自分の書物に書き記しているという事実を覚えるべきです。地上で獣、すなわち反キリストを拝む者たちが後に出てきますが、「13:8 地に住む者で、ほふられた小羊のいのちの書に、世の初めからその名の書きしるされていない者はみな、彼を拝むようになる。」とあります。反キリストを受け入れるのです。けれども、最後の審判において、主は名の記されていない者たちを火と硫黄の池に投げ込まれます。「20:12-15 また私は、死んだ人々が、大きい者も、小さい者も御座の前に立っているのを見た。そして、数々の書物が開かれた。また、別の一つの書物も開かれたが、それは、いのちの書であった。死んだ人々は、これらの書物に書きしるされているところから従って、自分の行ないに応じてさばかれた。海はその中にある死者を出し、死もハデスも、その中にある死者を出した。そして人々はおのこの自分の行ないに応じてさばかれた。それから、死とハデスとは、火の池に投げ込まれた。これが第二の死である。いのちの書に名のしるされていない者はみな、この火の池に投げ込まれた。」したがって、名が消し去られない、という約束はとても貴いものであり、これに私たちが集中しているべきだということを知覚すべきでしょう。私たちは、この地上において、信仰の戦いがあらゆる面にあります。そして何が大事か

を優先順位が崩れてしまうことがあります。身近にある困難や苦しみから解放されるのが目的なのか、それとも、命の書に自分の名が書き記されていることが目的なのか？

そして、最後の審判において、主イエスは父なる神に対して、私たち一人一人を、「この者は、わたしは知っています。」と言われるのです。「わたしは彼の名をわたしの父の御前と御使いたちの前で言い表わす。」ということです。もしそれをしてくださらないなら、神の前から退かれます、神の国の住民ではないですから、追い出されるのです。ですから、主が私を知っているとくださることは、とても必要なのです。イエス様は福音書で、同じように私たちがイエス様を人の前で認めることを教えておられます。「ルカ 12:8-9 そこで、あなたがたに言います。だれでも、わたしを人の前で認める者は、人の子もまた、その人を神の御使いたちの前で認めます。しかし、わたしを人の前で知らないと言う者は、神の御使いたちの前で知らないと言われます。」私たちが、イエス様を知っているでしょうか？親しく知っているでしょうか？そして、その親しい関係が、他の人々の前でも認めるように確立しているでしょうか？最後の審判のところに立つ時、イエス様も私たちを知っている、とさせていただきます。

6 耳のある者は御霊が諸教会に言われることを聞きなさい。』

すべての七つの教会にあるように、これは単にその地域教会のみならず、全歴史の、全教会に対して主が御霊によって語っておられる言葉です。私たちの教会にも語られました。

